介護 & 解語 ―施設からお答えします― 27

サービス調整する居宅介護支援

“ときどき入院、ほぼ在宅”というスローガンの下、国が推進しているのが、高齢者の方々が要介護となっても住み慣れた地域で自分らしい生活を最期まで続けられるよう支援する「地域包括ケアシステム」です。その一角を担う居宅介護支援事業所には、在宅生活を支える各種サービスを調整し、ケアプランを作成する重要な役割があります。山形徳洲会病院に併設する同事業所、山形徳洲会介護センターの小松慶多センター長（主任介護支援専門員、介護福祉士）が解説します。



小松慶多・山形徳洲会介護センター長（主任介護支援専門員）



ケアプランの作成に向けて患者さんの主治医（松田憲一朗・山形徳洲会病院脳神経外科部長［右］）から意見を聞く小松センター長（中央）

病院併設の居宅介護支援事業所では、主に外来通院する高齢者さんや、退院を迎えた高齢者さんのうち、介護が必要となった方々に対して、在宅生活を続けられるようサポートします。

たとえば外来通院のケースでは、加齢による体力低下や歩行の不安定、お薬の適切な服用が困難な場合などに、できる限りその時点の生活スタイルを継続していけるよう、通所リハビリテーションや訪問看護などの提供事業者を紹介します。退院時のケースでは、ご自宅の環境に応じ介護用ベッドや手すりの設置など提案します。自宅での入浴が困難な場合は訪問介護や通所リハビリを検討します。それぞれのケースで要介護認定の申請（新規・更新）代行も行います。

これらの介護保険サービスや、場合により介護保険以外のサービスも提供するために、居宅介護支援事業所に在籍する介護支援専門員（ケアマネジャー）が作成するのがケアプラン（居宅サービス計画書）です。

ケアプラン作成のため、ケアマネジャーは、ご本人やご家族との面談を通じて、解決すべき課題を分析するアセスメント（評価）を行います。アセスメントの結果やご本人・ご家族の意向を考慮し、必要なサービスを組み合わせたケアプランを作成します。ケアマネジャーがサービス事業者を集め、サービス担当者会議を開催後、サービスの提供を開始します。ケアマネジャーは定期的（1カ月に1回）に居宅を訪問してモニタリングを行い、ケアプランの実施状況を把握、必要に応じてケアプランを変更します。

ICTで効率化しきめ細かい対応 質向上に努め選ばれる事業所へ

山形徳洲会介護センターは利用者さんとご家族の希望を重視するとともに、アセスメントを的確に行い、安心して在宅生活を送れるよう、適切なサービスが多様な事業者から提供されるよう配慮しています。

時にはご本人・ご家族の間で意向が異なる場合もあります。たとえば、退院時に歩行に不安があり認知機能の低下も見られたケースでは、ご本人は自宅に戻ることを希望し、ご家族は在宅生活に不安を感じていました。そこで訪問介護、通所介護を利用しつつレスパイト（介護者の休息）でショートステイを時々利用するプランを作成。ご家族の不安を軽減しながら、ご本人の希望どおり在宅生活を送ることができました。

在宅生活の継続には、介護保険サービスだけでなく医療との連携など総合的な支援が必要で、きめ細かい対応が求められます。そのため当事業所はICT（情報通信技術）化を推進し業務効率化に取り組んでいます。

支援経過記録の音声入力や会議記録のAI（人工知能）要約、各種書類のクラウド管理、職員間の連絡ツール、職員相互のスケジュール・業務進捗の共有化などです。ご家族の都合に合わせサービス担当者会議のオンライン開催にも対応しています。

病院内に併設する訪問リハビリや通所リハビリへの紹介、在宅で生活している方が体調を崩された場合の受診や入院を含めての相談など、多職種連携も図っており、居宅介護支援事業所の果たす役割は非常に大きく、院内の収益にも貢献を果たしています。今後もケアマネジャー業務の質向上に努め、“選ばれる事業所”を目指します。

おくすりレクチャー

サプリメントや健康食品

手術前にすべて申告を



細野真吾
大垣徳洲会病院
薬剤部 係長

服用している薬剤などについて、お尋ねする際、つい「これくらい言わなくてもいいか」と回答を忘れられがちなのが、サプリメントや健康食品です。その種類は多く、代表的なビタミン剤だけでなく、ニンニクやショウガのエキスを固めた錠剤、プロテイン（タンパク質）などさまざまで、なかには「これはサプリだと思わなかった」という方もおられます。

しかし、最近のサプリは効きが結構良く、そのぶん副反応も強くなりますので、とくに術前は正確な申告が大切です。たとえば抗酸化作用をうたうビタミンEやDHA、EPA、ひざの痛みを和らげる効果を期待するコンドロイチンやグルコサミンは血液サラサラ効果（血小板凝集能の抑制）がある反面、出血を助長します。プロテインは普通の人が飲むぶんには問題なくても、腎機能の悪い方が飲むと、さらに腎機能が悪化する懸念があります。

こうした事前情報があると、場合によっては安全のため治療法や使用する薬剤を変えることもありますし、念のため術前2週間前には服用を中止するよう、お願いすることもあります。ハーブティーや薬膳スープなど、どこまで伝えればいいのかと悩むこともあると思いますが、とりあえず申告していただければ、医師、薬剤師が安全に問題ないか、お調べしますので、まずは正確な申告にご協力をよろしくお願いします。

看護のチカラ

現場の〝心〟に寄り添った感染管理 多職種連携で守る患者さんと職員

Vol. 7



前田久美子
葉山ハートセンター（神奈川県）
看護主任（感染管理認定看護師）

葉山ハートセンター（神奈川県）の前田久美子・看護主任（感染管理認定看護師）は、感染対策向上加算1の算定を機に、6月から専従として院内の感染対策に尽力している。現場看護師としての経験を生かしながら、多職種と連携を図り、職員と患者さんの双方を守る体制づくりに邁進する日々だ。



ICTラウンドでは良い取り組みを評価するよう心がける

2018年、前田・看護主任は当時の看護部長の勧めや子どもの進学といったタイミングが重なり、感染管理認定看護師教育課程に通い始めた。もとより熱傷センター勤務の経験から創傷や感染への関心が高く、学びを深める絶好の機会と捉えた。18年冬に同校を卒業後、20年5月の認定試験に見事合格した。

試験直前の20年2月、同院はダイヤモンド・プリンセス号での新型コロナウイルス対応にあたることになる。感染防止対策委員会の副委員長を担っていた前田・看護主任は、ICT（感染制御チーム）の看護師として現場に立ち、グループ内外の支援を受けながら対応に奔走。試練の時期を乗り越え、病棟勤務との兼務での活動を経て、今年6月には感染対策向上加算1の専従看護師となった。

専従化にともない、抗菌薬適正使用支援チーム（AST）の活動など多職種との調整業務が増加。薬剤科、検査科、医師を巻き込む調整は大変だが、小規模病院だからこそ顔の見える関係性を強みに、風通しの良い環境を生かした多職種連携を模索し続けている。前田・看護主任は「ICTラウンドで『チェックマンが来た』と言われることもありますが、良い取り組みを評価し、データで伝えるよう意識しています」と強調する。

兼務時代に現場の多忙さ、病棟看護師の不足といった課題を、身をもって知っているからこそ、一方的な指導ではなく職員の意見に耳を傾ける姿勢を大切にしている。また、コロナ禍を経て面会制限の解除を進める際にも、職員の感染予防意識を配慮しながら丁寧に説明を重ねた。

病棟巡回時には、患者さんや家族とも会話を交わし、感染対策や防護具着用についての不安を和らげるコミュニケーションにも心を配っているが、患者さんと職員の安全を守る環境づくりの推進が、現在のやりがいだ。

今後は自身の活動を通じて認定看護師の存在感を高め、次代を担う後進の育成にも意欲を見せる。すでに感染管理を目指す看護師のサポートにも着手しており、前田・看護主任は「職員の声を拾い上げながら、一緒にできる対策を考えていきたいです」と意欲的だ。



感染対策をテーマに医療講演で講師を務める前田・看護主任

この医療機器ってなあに？

テーマ サイバーナイフ



精密な放射線治療を実現

サイバーナイフは、がんなど病変をピンポイントで狙い撃ちする放射線治療装置です。放射線を出す部分がロボットアームの先端にあり、ロボット側が向きを変えながら、さまざまな方向から約100本の極細エックス線ビームを病変に集中させることで、精密な照射が可能です。

さらに、体のわずかな動きをリアルタイムで感知し、病変を追尾しながら照射を続けるため、呼吸で病変の位置が変わる肺がんや肝がんにも対応できます。照射中に痛みや熱さは感じません。治療は1回当たり30分前後、1～5回程度で終わります。高齢の方でも負担が少なく、痛みを和らげる緩和照射など生活の質（QOL）向上にも役立つ幅広い患者さんに適した治療です。当院では、サイバーナイフと広い範囲の照射に適したトモセラピーを使い分け、患者さん一人ひとりに合った放射線治療を提供しています。少しでも気になることがあれば、まずは主治医の先生にご相談ください。



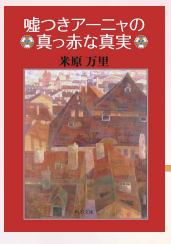
飯田 洋介
南部徳洲会病院（沖縄県）放射線部主任（医学物理士）

私の推し本

20年以上前、母と一緒にテレビのトーク番組を見ていた時、出演していた著者の米原万里さんが語る本書のエピソードがとても面白く、母が知人から借りて私にも読ませてくれた一冊です。

東西冷戦下の1960年代、チェコスロバキア（当時）のプラハにある学校で少女時代を過ごした著者が、各国から集まった同級生のなかでも、とくに親しかった友人3人との日々を振り返るとともに、約30年後、散り散りになった同級生らを訪ね歩くノンフィクションです。世界情勢に翻弄された当時の暮らしや、学生時代にはわからなかった事柄を深堀りし真実を解き明かしていく展開に興奮や感動を覚えました。

人は必ずどこかの「国」に属し、何らかの「母語」をもつ――。当たり前なのに忘れかけてしまう事実に、あらためて気付かされます。「多様性」がうたわれる今、どう付き合い、どう面白さを見つけるかを考えるきっかけになる本です。



『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』
米原万里・著（KADOKAWA刊、836円）



齋藤 崇
札幌もいわ徳洲会病院
医事課職員